トルコで大きな地震があった。動揺している。研究をやめてしまった先輩にも状況を聞いてみる。お互い取り乱しているだけなのだが、どこかくそのことを共有できただけでもなにか気休めにはなった。でもやっぱり状況はかなりひどい。何もできない。

■二月八日■
東より訪問者きたる。ハンマーを持って行こうか迷ってやめる。

■二月九日■
近所の大学の卒業展示へ。屋上に喫煙所がある校舎が最高だった。

■二月十日■
軽作業の傍ら、横でゲームしている人の生実況をみる。本格的にゲームやりたい。

■二月十一日■
アンカカラで留学していたときによくご飯へたクンとレアが京都で食べられるというイ情報を事前に仕入れていたのでお実際に行ってみた。

トルコから帰ってきてからもう随分経つ。

■二月十二日■
結局ニンテンドーDSを買った。何軒も中古ゲーム機の取扱いがある店を回ってから、金閣寺のとこにあるお店でやっと見つけた。店員さんが神々しく見えた。DSと一緒に ポケモンのソフト（グーリーグ）を買った。実際、目の前でやられたらみんなも欲しくなると思う。絶対そう。

■二月十三日■
ゲーム、ゲーム、ゲームのち徘徊。

■二月十四日■
実は研究会の予定がスっていたが寝坊したので欠席。大冒険してしまう。明日こそちゃんとしよう。

■二月十九日■
早朝から研究会。聴衆として参加するだけだったが緊張した。

終わった後、また冒険してしまった。なんとか捕まえたフリーザーに「あいす」、メタモンには「とろろ」という名前をそれぞれつけた。ちなみにカビゴンには「おやすみ」という言葉をつけた。
夜はお坊さまちとお事。文字通り「笑い転げる」お坊さんの姿が印象的だった。「寂滅為楽」という言葉を教えてもらった。おたしもそろそろだけど、もはや人類共通のテーマなん、と思った。仏教おもしろい。ポケモンばっかりやっていまいます、と自状したわたしにもお坊さんは優しかった。わたしも何かの役に立てるように頑張りたい。

■二月十一日■
鼻腔新月。このタイミングでノートの最後のページまで書き切った。時節が変わり、何かのドナーチャーズが終着し、また始まったと感じた。ミスドなげうるあまの分一度整理したりした。
かにしたいのの分一つも食べて、自分が研究を通して何を明らかれはまでは何人もいるようだが、自分の背中を押してくれるような存在が何人もいるようだが、やるしかない。

■二月二十二日■
新しいノートを使い始めた。インスタで見つけた投稿、こないだの地震があった地域で瓦礫の中から見つかったノートに書かれた文章。それをそのまま1ページ目にコピーして書いている、未来への決意と祈り。
夜はY に電話 長電話になってしまった。

■二月二十三日■
昼頃起床。夜は授業。終わった後、事務局の方と来年度の授業について相談。一瞬で春になってしまいそう。

■二月二十六日■
大学時代の恩師から突然の電話。日本に帰りたくないよお、と率直な叫びに爆笑。その後、10年前にアンカラで一緒だった人から連絡がきた。図らずも懐古、いと時（きだ）過ぎ。

■二月二十七日■
「何もからない」という状態に立ち戻る。こういう日もあるのだ。時をそうするのは双子座だから、と思いつつしている。運命とは時に残酷だが、言い訳にもなる。
書類仕事を済ませる。

二月

■二月二日■
昼ごろ起床。夕方ハンバーガーを食べる。Yはわたしのカルピスを飲んで「夏の味がする」と言った。帰り道、携帯がないことに気がつく。携帯を失くす気分を初めて味わう。夜はいつも通り授業。Yは明日帰る。最後の夜だからと何となくバーに来てみた。そしてYの隣で日記を書き始めることにした。時が過ぎるのはあっという間だと感じる。

■二月三日■
節分。二十四節気による区分だと明日が立春で、新年的な扱いになっているそうだ。だから今日は年末みたいなものだ。暦のバリエーションが多いことに、大人になってから「ありがたい」と思うようになった。
全身の細胞が生まれ変わるような錯覚。
Yを送り出す前に一緒に嵐山へ行った。行きの電車の中で「おかきの串が食べたいね」と話してたけど、結局食べれなかった。
観光客がたくさんいた。わたしも京都でずっと観光客みたいな気持ちで生きている。というか生まれた時からこの世界における観光客なのかもしれない。竹林でそれらしい記念写真でも撮ればよかった。

■二月四日■
だらだら過ごしてしまった。
今朝は長い夢の中で、平安時代の京都っぽい何かを見た。一条天皇の周りの女性たちの物語と関連した内容だったと思うが思い出せない。幽霊がたくさん出てきたことと、生首がそこらじゅうに散乱していたのは覚えている。明らかに嵐山散策の影響だった。
午後はトルコのルポルタージュなどを視聴。「無神論協会」の存在を知る。向こうのアテイストと言うのは日本の無宗教とは何もかもが違う。肯定するにも否定するにも、きちんと根拠を求めて自分の立場や考えをあらわにする人たち。若い人でもそういう人がたくさんいることに純粋に驚く。とはいえ自分はそうなりたいともなりたくないとも思えない。ただ、他人に、何を信じているのか？　と迫られるのは嫌だ。どんな音楽聴くの？　と同じくらい嫌な質問だと思う。秘密は秘密だからだ。

■二月七日■
日記を書く手が止まってしまっていた。

Diarists 2023
[February]

2

真殿琴子

Orcinus Orca Press

真殿琴子
（大学院生、宗教学）

発行
Orcinus Orca Press
Instagram: @orcinusorcapress
Twitter: @Kanko_1852

2023年3月10日　初版第1刷発行